

平成22年度研究成果報告書《学力の把握》

ふりがな 学校名	ひょうごけんりつあかしきたこうとうがっこう 兵庫県立明石北高等学校
-------------	--------------------------------------

校長名：栗岡 誠司

所在地：兵庫県明石市大久保町松陰 364-1

電話番号：078-936-9100

(1) 学習指導要領に定める目標等の実 現状況の把握に関する研究	
研究対象教科等	地理歴史（日本史B）

《研究主題》

資料活用能力を育成する日本史B
の展開

【研究の要点】

<p>1 授業の工夫</p> <p>生徒が思考や判断をする活動場面で資料を活用し、思考や判断する際の材料として資料を扱えるように配慮した。また、「思考・判断」と「資料活用の技能・表現」を関連させて授業が展開できるように工夫した。授業形態では、他者と意見交換することにより、新たな気づきを導き出したり、自分の考えを補強できるように、グループ学習を積極的に取り込んだ。</p> <p>2 評価の工夫と成果</p> <p>生徒に求める能力を細分化し、階層的に捉えて、生徒に段階的に身に付けさせるように工夫した。これによって、評価規準に具体性を持たせることができた。</p>

I 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

昭和47年、明石地区では3校目の普通科高校として開校した。昭和61年、理数コース（平成15年より自然科学コース）が設置され、地域では自然科学系に強い進学校「勉強の北高」として地域住民の間に定着している。平成22年度より、スーパーサイエンスハイスクールの研究指定を受け、理数教育のカリキュラム開発

がはじまった。

2 学校の概要（平成22年4月5日現在）

課程	学科	1年		2年		3年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全 日 制	普 通 科	9	361	8	318	9	352	26	1031
計		9	361	8	318	9	352	26	1031

教員数 53名（7名）

研究指定を受けている期間で、入学者選抜方法の変更があり、日本史Bの開設状況は大きく変化した。現在は、日本史Bを文類型（4or5クラス）の選択科目として設置している。第2学年で、日本史A—世界史Bもしくは日本史B—世界史Aを選択して履修している。第2学年で選択したB科目を第3学年で継続履修する。

（科目の選択者数）

第2学年	第3学年
日本史B 100名	日本史B 130名

II 研究の内容及び成果等

1 研究主題について

(1) 研究主題

資料活用能力を育成する日本史Bの
展開

(2) 研究主題設定の理由と対象

○ [研究主題設定の理由]

資料の活用を重視した考察や追究を通して、社会的な能力としての思考力・判断力・表現力を高めることにより、歴史的思考力が育つという仮説を設定した。ここでいう歴史的思考力は、歴史事象の全体像を把握できる能力、時代と時代の移り変わりを把握できる能力と想定する。

歴史的思考力は、以下の手順で身に付けることができる。と考える。

- ①生徒自身が与えられた資料の性格を検討できる。
- ②資料から信頼性の高い情報を取り出すことができる。
- ③資料に基づいて、歴史的事実の因果関係を思考することができる。
- ④事実認識に基づいて、歴史事象の意義について説明することができる。

評価については、四観点のうち、特に「思考・判断」「資料活用 of 技能・表現」について、それぞれの能力を細分化し、階層的に捉えて、生徒に段階的に能力を身に付けさせる工夫・改善を図った。

○ [調査研究の対象]

研究の1・2年次は、3年生の日本史B選択者を対象とした。資料活用能力の育成をテーマに、「近代国家の成立」のうち「開国と幕末の動乱」を調査研究の対象とした。近代史学習の出発点であり、世界の情勢を背景に授業を展開することができる。幕末期には多くの瓦版が出され、当時の人々の思いを感じ取ることができる資料が多く存在している。また、瓦版には判じ物（文字や絵画に、ある意味を隠して表現したもの）を掲載したものが多く、生徒の興味・関心を引き出しやすい。思考も促しやすい反面、現代では難解なものもあり、そういった資料を生徒がどのように活用するのか判断できると考えた。この他の単元においても、資料を活用した授業を展開している。

研究の第3年次は、第2学年の日本史B選択者を対象とした。理由は、研究を進める段階で、資料に対する基本的な扱い方を学習の早い段階から習得させておく必要を感じたからである。「歴史の考

察」「日本文化の黎明」のうち「資料にふれる」「文化のはじまり」から「古墳とヤマト政権」を調査研究の対象とした。

「資料にふれる」では、さまざまな歴史資料の存在に気づくこと、考古学・文献史学の研究方法の基礎を身に付けることを期し、その後の学習活動に生かせるように適切な時期に実施した。「文化のはじまり」以降については、復元図などの資料を比較しながら、考察する場面を設け、相違点や共通点を見つける能力を身に付けることができると考えた。

2 評価の具体例と考察及び指導の改善

①評価の具体例

以下、研究年次を追って記述する。

(1)「三都の発達」

「江戸図屏風」の日本橋界隈の図から教師が追究課題を示し、グループで討議を行い、課題に対する答えとして仮説を立て、発表する。発表した仮説に対し

江戸の町を考える!
与えられた課題
河岸が石垣なのはなぜか?
仮説
それは
大阪を見本にして人工的に運河を整備した
洪水を防ぐ
水を通すこと防ぐ
から
反論
何で運河を作る必要があったのか
反論への対応
江戸や大阪への貢米輸送の必要。諸大名の産業振興策、一般的な経済がよび、子身体ともあり、大量輸送が必要になった。
結論
江戸湾に入る物資を江戸城に運ぶためのバypassとして大阪を見本としたため、河岸が石垣である。
運河の発達により、江戸に物資がいっぱい入って、江戸が発展した。それが人工垣になった。
感想(班の各自が書き末尾に名前を記入)
・今まで気にそびれていたことだけが知られていなかった()
・運河の興味があったけれど昔の人はどうして便利になるよう考えたんだと思った()
・資料から調べたことが多かった。おもしろかった()
・資料ではわからなかったことが、先生の話や資料でわかった()
・このことを資料を通して勉強していくのはおもしろかった。またこのことをしたいです。()
・資料を見て分かることと、先生の話でも分かることと、()

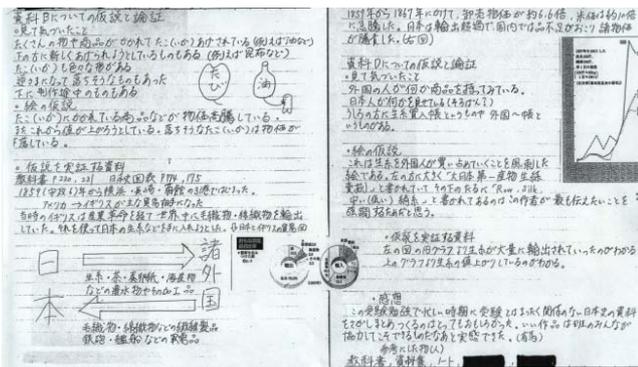
(評価Bの生徒のワークシート)

て、他のグループから反論がなされるので、反論に対応しながら結論に至る展開を行った。

評価の観点「資料活用の技能・表現」で、ワークシートを評価材料として、評価規準を「資料から課題解決に必要な情報を取り出すことができる」とした。生徒同士の議論はかなり白熱し、参考文献を探して理解を深めたり、論理性を高めたり主体的な活動が見られた。評価の観点「思考・判断」と「資料活用の技能・表現」がどのような関係を持っているのか考えるきっかけとなった。

(2)「開国の影響」

判じ物など数種類の資料を示し、グループで資料の読解、テーマ設定、調査活動、まとめ、発表を行った。資料の中にあえて関連の低い資料も加えていたので、資料の選択、補うべき資料を加える指示をした。作成された発表用資料を評価材料として、評価規準は、的確な資料が選択でき「発表用レジメの作成に際して、要旨を明確にしつつ整理することができる」とした。生徒が設定したテーマは、「物価の高騰」「浮世絵が世界に与えた影響」などで、発表用資料では、教師が示した資料のうち欠けているもの、例えば統計資料などを補うなどしている。発表用レジメは、いずれも満足できるものであった。評価規準に沿って評価活動



(評価Bの生徒の発表用レジメ)

を行ったが、(1)の評価と同じく、グループの評価が個人の評価を左右することになってしまう傾向が否定できなかった。グループ内の積極的な生徒の活動が、他の生徒の評価に影響を与えることとなることから、この点の改善が求められた。

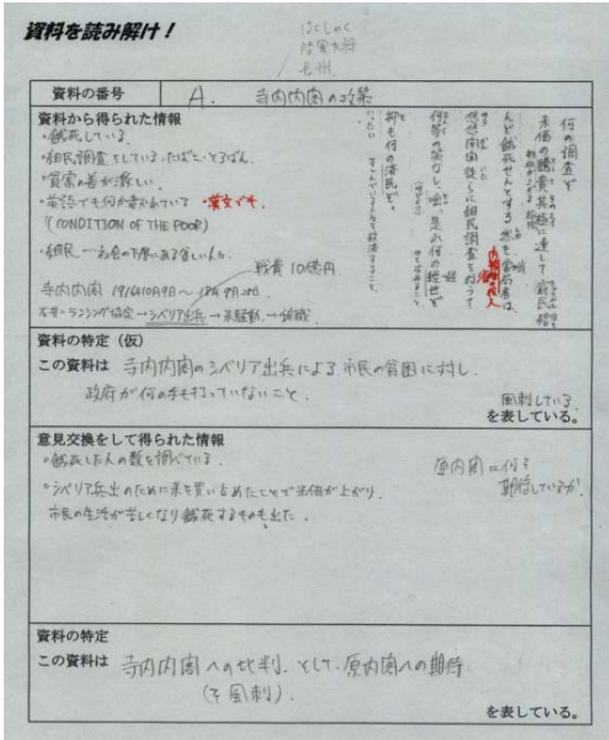
(3)「政党政治」

米騒動と原内閣の成立について、課題を見つけ、仮説を立て追究する授業を行った。(1)の反省に立ち、グループによる学習活動と個人による学習活動を混在させながら、問い「なぜ～だろう」の設定と考察を行った。

具体的には、最初に個人による資料読解を行い、グループ内で資料を説明しあう。そして、同じ資料を担当する者同士が集まり資料読解した内容を議論し、意味内容を特定する。再び、元のグループに戻り資料の意味内容をメンバーに説明し、資料について共通認識を持たせ、問いを設定し、追究する学習を行った。

ワークシートを評価材料とした。規準を「資料からの確に情報を得ることができる」「得られた情報を整理して論理的に説明することができる」とした。(1)(2)ではできなかったグループ学習の中で個人への評価活動がスムーズに行えた。しかし、規準が抽象的であり、資料を無批判に読み解くなど、資料の特性を判断する能力が低いため、こちらが期待した結果に到達できないなど問題もあった。補助資料と教師の助言により、最終的には多くの生徒が概ね満足できる状況となった。

次図に示すのが、評価Aとした生徒のワークシートである。与えられた資料からあらゆる情報を意欲的に引き出しており、生徒同士の意見交換を経て、期待以上の資料への評価ができています。



(評価Aの生徒のワークシート)

(4)「資料をよむ」

(3)の教師が示した資料を無批判に読み解こうとする生徒を目の当たりにし、批判的に資料に向き合う態度を養うために、「資料をよむ」単元を発展させた。a 古文書と考古資料にふれる、b 型式学を身に付ける、c 資料を批判的に見るという三つの場面を設定した。

a については、古文書を読解し、考古資料にも同じ事象を示すものがあることを理解できた。評価材料はワークシートで行い、評価規準として「キーワードとなる地震、津波を指摘できる」と設定し



(古文書を読む)

た。これは、後述する細分化した能力のうち「読解する」、「認識する」に当たる。

b については、グループで疑似体験的に型式学を学び、個人でその方法を応用して、実物の考古資料を年代順に並べ変えた。資料の新旧関係を特定することは難しいが、根拠を持って資料の変化を並べることはできるので、「根拠を示して、資料の変化を並べ替えることができる」を評価規準とした。ここでは、「比較する」「関係を見つける」「矛盾を見つける」能力を評価する。評価材料は、ワークシートである。



(考古資料を扱う)

c については、「蒙古襲来絵巻」を使用し、後世の書き込みとされる部分を確認する作業を行った。これは、「比較する」「矛盾を見つける」「疑問を抱く」能力である。同時に文献史料である「八幡愚童訓」を読解し、絵画資料、文字資料がそれぞれもつ有効性を確認した。ここでも、ワークシートを評価材料とし、評価規準として「絵巻の中に見られる矛盾点を指摘することができる」と設定した。

b, c については、いわば「考え方を考える」授業内容となっている。この成果を、どのような学習場面に生かせるのか、その場面設定を考慮した上で実施すれば、さらに効果が上がったと考えられ

る。ただ、例えば、生徒が手紙という資料を読む際に、誰が誰に宛てた手紙なのか、手紙というものがどのような性格であるのかを自分で確認するといった姿勢を見せてきており、学習成果の一端を見せている。

(5) 「日本文化の黎明」

近隣の古墳時代の遺跡から出土した土馬を手掛かりに、古墳時代から現代までに日本人が馬とどのように関わりあってきたのか、その歴史を追究する。そして、古墳時代における人と馬との関わり方から王権の特徴と古墳文化について考察した。考古資料、統計資料、写真、絵画資料、復元図などさまざまな資料を活用した。

ワークシートを評価材料とし、評価規準を「問いに対する仮説が立てられ、資料に基づいて検証することができる」とした。多種多様な資料群となり、手に負えない生徒も出ており、教師の示唆を受けて目標に到達できた者も多くいた。

② 考察と指導の改善

(1) 評価規準に具体性を持たせる試み

評価の具体例(3)までの反省に立ち、評価規準に具体性を持たせるために、「資料活用の技能・表現」、「思考・判断」についてその能力を細分化した。例えば、資料活用の技能では、資料読解力として、資料から要素を取り出せる能力、資料の内容を識別できる能力というように設定した(表1参照)。

これにより、資料活用の技能の中で、どのような能力を生徒に身に付けさせるのか、という授業のねらいを教師自身が意識することができる。したがって、評価規準もより具体性を持ったものにすることができた。思考力についても、能力を細分化し、具体性を持たせた(表2参

照)。

資料読解力

読解する(要素を取り出せる)

認識する(識別できる 区別できる)

資料分析力

比較する(比べられる→照合できる)

関係を見つける(共通点を取り出せる)

矛盾を見つける(不合理な部分を見つけられる)

疑問を抱く(不明な部分を見つけられる)

解説する(自分の言葉で言い換えられる→説明できる)

資料判別力

収集する(適否を判断できる)

活用する(思考・判断などの際に根拠として利用できる)

表1 「資料活用の技能・表現」細分項目

思考力

構成する(構造化できる 図式化できる)

想像する(イメージできる)

見通す(結果が予想できる 成り行きが予測できる)

問題解決能力

仮定する(仮説を立てられる)

探究する(調べられる 問題解決に迫れる)

検証する(個別の結論を導ける)

一般化する(個別の事実から一般的法則を導ける)

判断力

価値受容する(価値を理解できる)

価値判断する(価値を判断できる 意志決定できる)

表現力

発表・表現する(説明できる)

表2 「思考・判断」細分項目

また、歴史的思考力との関係だが、例えば、表2の構成する思考力は歴史的思考力而言えば、歴史的現象の因果関係を突き止める能力と置き換えることも可能である。能力に具体性を持たせることで、評価規準を具体化できた例が表3である。

単元	「資料を読む」	実施日	4月14日
ねらい	歴史叙述が資料を基に行われていることを理解し、歴史資料の重要性を理解することができる。		
観点	資料活用の技能・表現（読解する、認識する）		
評価の場面		評価規準（B）	
配布された資料から事実を抜き出していく場面。		資料中の、「元禄」「地震」「津波」という文字を確認することができる、被害状況をまとめることができる。	
おおいに満足できる（A）の具体的状況		努力を要する（C）に対する手立て	
資料の内容を理解することができる。考古資料についても、時代を特定する方法を理解でき、資料の重要性を認識することができる。		読解段階で行き詰まりを見せる生徒には、早めに関心文（補助資料）を配布し、作業を進めさせる。	

表3 具体化した評価規準の1例

(2) 評価問題の工夫

授業で使用した資料とは別な資料を用意し、資料活用の技能、資料に基づいた思考力を問う設問を出題した。

(3) 生徒にとっての成果

生徒の授業評価を見てみると、科目への関心の高まり、資料からの読解、資料を基にした考察、いずれも肯定的に回答している。生徒の主体的な学びにつながったと考えられる。

日本史学習への関心の高まり（％）	
かなり高まった	13
高まった	70
高まらない	17
全く高まらない	0

資料からの情報の取り出し（％）	
かなりできた	37
できた	53
あまりできなかった	10
全くできなかった	0

資料をもとにした考察（％）	
かなりできた	34
できた	53
あまりできなかった	13
全くできなかった	0

3 成果の普及と今後の展望

(1) 成果の普及

- ・兵庫県高等学校教育研究会社会（地理歴史・公民）部会，秋季研究授業大会での研究授業（H20）
- ・公開研究授業の実施（H20～H22）
- ・10年経験者研修での実践事例報告
- ・兵庫県立考古博物館主催「考古博秋祭り」でのポスターセッションによる実践報告（H22）
- ・本校ホームページでの公開

(2) 今後の展望

- ・「関心・意欲・態度」の評価方法を模索中である。本年度より、授業振り返りシートを活用して評価する計画を立てたが、負担の割には成果が出ていない。
- ・常に評価規準の見直しを行い、運用していく。
- ・生徒の自立した学習を促すための工夫と改善。